

諸報告へのコメント（その2）

ユ・ヒョジョン



和光大学のユと申します。韓国出身です。日ロ戦争そのものや日ロ関係を専門的に研究しているわけではないので、最初は辞退を申し出ましたが、本日の集まりは市民の立場から日ロ両国がより平和な関係になることを願う人々の集いであること、そして同じ市民の立場から考えたことを気軽に述べてくれればよいから、と説得されて引き受けました。

日ロ戦争を直接研究しているものではないと申し上げましたが、かといって研究テーマが本日のテーマと全く無関係なわけではなく、日ロ戦争によって生まれたある状況を民族関係や国際関係に着目して跡付ける、という研究をしています。そうした立場から、まずは皆さんのお話を聞いた感想を少し述べさせて頂きたいと思います。

ご承知のように、日ロ戦争は、朝鮮をめぐる戦争でもありました。そしてその結果として、朝鮮の独立は実質上失われ、それを取り戻そうとする朝鮮人の運動は国外にまで広げられるようになります。そのなかでもロシアはもっとも有力な基地の一つでした。そしてこのような運動は極東の朝鮮人が根こそぎ中央アジアへ強制移住させられる1937年まで続けられますが、それまでにいたる過程は全体としてまさに「戦争」と「平和」にかかわるものだったともいえます。

これはロシアで活動していた人々に限定されるものではありませんが、抗日独立運動のために国外に出た人々は、ある国が日本と戦争する機会を期待し、その際に、その国の側になって日本と戦い、勝利することで朝鮮の独立を回復するという戦略をもっていました。一方、ロシア側においても、「日ロ戦争では国内の状況のゆえにやむなく敗北を受け入れざるを得なかったが、戦争はまだ終わっていない」「体制を整えて近いうちに再び戦うのだ」というような雰囲気がいしばらく続きました。

そしてこの「日ロ再戦」は、1917年のロシア革命後にシベリア戦争（「シベリア出兵」）として現実のものになりました。当然、朝鮮人の多くは革命派側になって日本に立ち向かいました。革命派やソヴィエト政権も朝鮮人やその運動を重視し、様々な支援を提供しました。

ところが、22年にシベリアから日本が撤退し、25年に日ロ両国が国交を取り結ぶと、ソヴィエト政権は、一転して朝鮮人の運動を抑圧し、朝鮮人の反日意識を押さえつけることになります。37年の強制移住も実は似たような構図の中で行われたものです。この年の9月に極東ロシアに住んでいた18万人もの朝鮮人がたった4ヶ月の間に根こそぎ中央アジアへ強制移住させられますが、これは当時ナチスの登場によって独ソ戦の危機が高まっている状況の中で、東で日本とも戦うことはなんとしても避けたいと考えたソヴィエト政権が、自らに対する侵略の口実を日本に与えないために、

戦争の火種になりかねない朝鮮人社会を根こそぎ解体させようとしておこなわれたものです。つまり、これらは日本との戦争を避け「平和」を保つために、それまでにロシアに忠誠を尽くしてきた朝鮮人やその運動を犠牲にしたものです。

このような状況が示すのは、二国間関係では一見当たり前のように考えられる「平和」と「戦争」の関係が、それらに深く関わる国や民族を含めたより広い関係からみると、決して簡単なものではないということです。つまり、二国間の「平和」の追求が別の民族の「平和」を脅かし、その民族は、自らの「平和」を取り戻すためにやむを得ず「戦争」に訴えかけるような場合もあるということです。抗日独立運動を推し進めていた朝鮮人の立場からすれば、「戦争」こそ自分たちの「平和」を取り戻すための最大のチャンスとなるわけです。その意味でも「平和」を追求するにしても、その「平和」がだれにとっての、そして、どのような「平和」なのかも同時に考えることが大切であると考えます。こういった話は、もちろん日口関係や日口戦争に限らず、最近起こっているイラク戦争を含めてあらゆる戦争についても言えることだと思われます。これを一つみなさんに提起しておきたいと思います。

次に、これはソク先生にもっと詳しくお聞きしたいことでもあります。近年、韓国でも日口戦争をめぐる研究が活発なようで、そのなかでは従来はあまりみられなかった問題提起もなされているようです。

そのなかでわたしがとりわけ注目したいのは、日口戦争時の韓国人の意識、気持ちにかかわる次のような新しい見方です。当時韓国では皇帝から一般の民衆まで、基本的には「戦争が起こらないでほしい」と願っていました。しかしいざ戦争になると、先ほど和田先生の話にもありましたように、皇帝高宗はロシアに期待をかけつつ、開戦の直前に中立宣言をするわけですが、これは日本側によって端から無視されてしまう。それでも未練を捨てずにロシアをはじめとする列強に期待をかけいろいろな試みをしていきます。これに対して、一般民衆は当然ながら直接的に抑圧を受ける立場でしたから、反感を持ちつつ抵抗したということが一般的に言われています。このような中で、日口戦争に際して、当時の韓国民一般が必ずしも、「ロシアに勝ってほしい」「日本が負けてほしい」というふうに思っていたわけではなかったことを裏付けるような研究が最近現れてきています。

それはどういうことかと申しますと、もちろん戦争は起こってほしくなかったものの、いざそれが現実となると、従来いわれてきたこととは違って、「日本に勝ってほしい」と願う気持ちを抱く人々も多くいたということです。このように考える人々は、この戦争を、人種間の戦争としてとらえていて、どちらかとすれば日中韓の東アジア三国の提携という形で、白人のロシアに打ち勝つことを期待したというのです。そして「連携」であるからには、日本が勝つからといって、その日本に韓国や中国が侵略されることは当然ない、と期待していた。このような気持ちがかかなり広く高まっていったと最新の研究は述べています。もとより、このような雰囲気は、戦争終結後の日本による植民地化のプロセスが進むにつれて、次第に消えていき、そして期待が裏切られたことで日本に対する反感はいっそう激しくなっていきますが、こうした新しい問題提起は、従来の通説に一石を投ずる注目すべきもので、今後、これを裏付けるさらなる研究が期待されます。

ではなぜこのような状況になるのか。つまり、日口戦争を人種間の戦争ととらえるようになった

のにはどのような背景があったのか。これについての私見を述べますと、1900年の義和団運動の際のロシアのプレゼンスが大きく関係しているものと考えられます。義和団の運動をつぶすためにロシアをはじめ8カ国が共同出兵を行いますが、そのうちもっとも多くの軍隊を送ったロシア軍が、アムール川を越える手前の段階で、今のブラゴヴェシチェンスク周辺のロシア領にあった64個ともいわれる、清国国籍者の村々を襲撃し、数千とも1万以上ともいわれる人々を虐殺し、壊滅的な打撃を与えます。この村々は実は1858年のアイグン条約によって、今のアムール川の左岸地域、つまり北側がロシアの領土になる際に、土地はロシアのものになるものの、それまでにこの地域に住んでいた清国国籍の人々に関しては、続けて居住を認め、そして彼らに対する管轄権は従来どおり清当局が保持することが清側の強い要求によって確認され、そのまま残されていたものです。ロシア側はそれ以降様々な形でその「解消」を試みるわけですが、それに対する中国側の抵抗もなかなか頑強であったので、実現できず、この存在はいわば自らの喉に刺さった刺のようなものとしてロシア側を悩ましていました。結局、ロシアは1900年の満洲占領のための出兵を好機と捉え、武力を用いてその解決を試みたのです。そのやり方は実に残虐なものであったようで、レーニンもそれを「ロシアの残虐性」の発露として厳しく批判する論文を『イスクラ』に載せています。当然、この知らせは直ちに東アジア3国に広く伝わることになり、やがて3国連帯論を盛り上げる一つの大きな契機になっていったと思います。

今回のシンポジウムに先だって、ネットなどをいろいろ調べる過程でわかったことですが、その翌年に日本では「アムール河の流血や」という歌が生まれています。これは、旧制一高の寄宿舎の歌として生まれたようです。その歌詞は、「一、アムール河の流血や 凍りて恨み結びけん 二十世紀の東洋は 怪雲空にはびこりつ 二、コサック兵の剣戟や 怒りて光散らしけん 二十世紀の東洋は 荒波海に立ちさわぐ 三、満清既に力盡き 末は魯縞も穿ち得で 仰ぐは独り日東の 名もかんばしき秋津島…」というものです。ここに歌われているのは、三国提携というものを一気に打ち立てながらも、清は薄い絹も突き抜けないほど弱まっており、その代わりに日本がアジアの盟主として取りまとめていかないといけないということです（シンポジウムの後、以上のような背景を含めて、この歌が次の本に紹介されていることがわかった。山室信一『日露戦争の世紀』岩波新書、2005年、90～92、182～183頁）。

興味深いことに、1922年につくられたこの歌は、それからさらに20数年後の第3回メーデーのための応募作の中から採択された新しいメーデーの歌として、同じメロディーに歌詞をつけ替えた形で再び登場します。そしてその後、多くの高校の応援歌としてまた同じメロディーが使われました。このなかにもまさに革命と、そして、アジアの盟主として出て行くというもう一つの方向性が交差していることが見て取れます。先ほどの報告では非戦論のことがいろいろ紹介されましたが、その対極にあるもう一つの側面、あるいはより複雑に絡んでいるような側面も、同時にきちんと拾い上げ、一緒に考えていくための材料とするということが、日ロ関係の複雑な歴史を考えていく上で重要ではないか、と強く感じました。

（劉孝鐘 和光大学教授）